

愛

作

折田

登
場
人
物
男
女
医
者

男、タバコを吸っている。
そこに女登場。

男 「あ」

男、慌ててタバコを消す。

女、通りすぎようとする。

男 「あの、すみません」

女、立ち止まる。

男 「突然気持ち悪いかもしれないんですけど、あの。よくここ通ってますよね。オレ、すぐ近くの会社で働いてて、それで」

女 「はあ」

「なんていうか、一目惚れでした。もしよければお友達からといただけますか、連絡先、交換してくれませんか」

女 「私、そんな美人じゃないのに」

男 「何言ってるんですか。オレ、はじめて見たとき、思わずタバコ落としちゃったんですよ。見惚れちゃって」

女 「フフフ。変な人。でも私、とっても用心深い。連絡先は怖くてあげられないわ」

男 「アハハ、ですよね。大丈夫です」

女 「……ここに、よくいらっしゃるんですか？」

男 「え、ええ。そうです」

女 「フフ、それならまたこうして、ここでお話しましょう。タバコはあんまり得意じゃないから、火はつけないでくれると嬉しいわ」

男 「もちろん」

女 「それじゃまた」

男 「はい。また、ここで」

女 「フフフ」

女、退場。

男、女をじっと見つめてから、小さくガッツポーズ。

男、新たにタバコを吸おうとして、悩んでから止める。

女 「喜ばれるのは心外だわ」
男 「すみません、つい」
女 「フッフ、変な人」
男 「変な人は嫌いですか？」
女 「さあ、どうかしら」
男 「弱ったな」
女 「何が？」
男 「気になって眠れなくなりそう」
女 「やだ、そんなに？」
男 「そんなに」
女 「大丈夫よ、あなたのこと嫌いじゃないわ」
男 「良かった」
女 「眠れそう？」
男 「ハハハ、はい。つていうか、うーん、まあ、薬飲んでるんで、それでなんとか」
女 「あら、そうだったの」
男 「今じゃ薬ないと寝れなくなっちゃいましたよ」
女 「添い寝でもしてあげたいところだけど、私そろそろ行かないと」
男 「あ、……オレも会社戻ろうかな」
女 「お昼ごはんはいいの？ 食べてないんでしょ」
男 「お腹減ってないんで。途中までご一緒してもいいですか」
女 「もちろん」
男 「良かった。病院はここから近いんですか？」
女 「病院じゃないの。すぐその製薬会社よ」
男 「え、オレの職場かも。その製薬会社の経理やってるんです」
女 「あら。じゃあ会社のなかでもすれ違ってるかもしれないわね」
男 「アハハ、すれ違ってたら分かりそうですけどねえ」
女 「本当？」
男 「ホント。絶対すぐ分かりますよ」
女 「(笑う)」
男 「だってオレ、あなたのこと、20メートル離れたところでも見つけたことありますもん」
女 「(笑う)それはすごい」

と、喋りながら二人、退場。

(出会ってからしばらく経過)

男、登場。女を探すがいない。

タバコの変わりにガムを食べる。

女、登場。

男 「あ」

女 「あ」

男 「見て。ガムにした」

女 「偉い」

男 「ハハハ。1日5本までにしてるよ、タバコ」

女 「うん。偉い」

男 「どれくらい偉い？」

女 「このくらい(身体表現)偉い。フフフ、何やらせんのだよ」

男 「アハハハハ」

女 「も〜」

男 「ごめんごめん。かわいくて」

女 「そう言っておけば許されると思ってるんでしょ」

男 「許してくれないの？」

女 「考えておきます」

男 「許してほしいなあ」

女 「紅茶一本でいいわよ」

男 「すぐ買ってくるよ。ちょっと待ってて」

女 「あら」

男、退場。自販機へ。

電話。

女

「もしもし。……今日？ 仕事は18時に終わるから、そうね、到着は18時になると思うけど、現地に行くから、みんな先に入ってる。うん、それじゃあね。ふふ、久しぶりね」

男、帰ってくる。

男

「お待たせ」

女 「(男)ありがとう。(電話に)それじゃまた晩にね。え? もう、彼氏じゃないわよ。はいはい、またあとで」

男 「ごめんね電話中に」

女 「そんな、気にしないで。妹からなの。家族でごはん食べにいこうって。この歳になるとあんまり集まらなくなるじゃない? 久しぶりだから嬉しくて」

男 「いいね。オレも、もう何年も実家帰ってないなあ。年末の電話くらいだ」

女 「あら、帰らないのね」

男 「うーん、親父とあんまり仲が良くなってね。つい足が遠くなると思いますか……」

女 「そうなの……」

男 「ごめん。楽しくない話になっちゃったな」

女 「そんなことないわ。紅茶ありがとう」

男 「うん」

女 「……兄弟はいるの?」

男 「んー、いないよ。ひとりっこ」

女 「ああ、分かる。そんな感じ」

男 「そう? 君は、妹さんがひとり?」

女 「そう。2つ下なの。すっかりした子でね、フッフ、どっちがお姉ちゃんか分からないわ。私が今飲んでる薬もね、妹が探してくれたの。そんな実験台みたいな止めたほうがいいって親からは止められたんだけど、今はこの薬しかないから、効果があるかは分からないけど、飲んだほうがいいんじゃないってね」

男 「なんの薬かは聞いていいのかな。その、守秘義務もそうだけど、何より君自身が嫌じゃなければ」

女 「全然。でも、変に思わないでね。あんまり有名な病気ではないの。聞いたことないかも」

男 「一応製薬会社勤めですから」

女 「そうね。あのね、私、愛を忘れる病気なの。愛、特に異性に向ける愛をね、忘れてしまうらしいのよ……」

照明変わる。

医者、すぐに登場。歩きながら男と会話している。

女は医者と交代で無機物のように退場。

医者 「愛忘れか。本人の自覚がなく、周辺の人物が気付くことで判明するケースが多い病気だね。突然相手に忘れられた側の気持ちを想像するとなかなか面白い」

男 「思ってもいいが胸に秘めときなさい」

医者 「君にしか言わないよ」

男 「その、愛忘れてさ、認知症や健忘症とは違うのか？」

医者 「違うね。深く愛した人物だけをまるっと忘れてしまうのさ」

男 「深く愛した人物だけ……」

医者 「愛の深さは人によるだろうが、ともかく、人にはそれぞれ愛のメーターがあるわけだ。愛忘れはね、メーターの、ある一定以上を超えてしまうと、その人物のことをきれいさっぱり忘れてしまうんだよ。笑い方、爪の形、歩く速度、髪の毛の、どれだけ愛したか、その全てをね」

男 「治療は？ 薬は効くのか？」

医者 「難しいね。いかんせん、まだ原因がはっきりしてないんだから」

男 「……」

医者 「正直、彼女とあんまり深い仲になるのはオススメしないかな」

男 「でも、好きなんだ」

医者 「ま、君が決めることだ。薬が効くことを願ってるよ。友人としても、研究者としてもね」

男 「ありがとう。あ、そうだ今月分の」

医者 「ほら(と、薬を渡す)」

男 「助かるよ。いやあ、薬がないと眠れないっていうのは悲しいね」

医者 「ハハハ、そうかもな。……どうだ、眠れてるのか？」

男 「お陰様で。じゃ、ぼちぼち戻るよ」

医者 「ああ」

男、退場。

医者 「眠れてる、か」

医者、退場。

3

夜。

女、男、喋りながら登場。

女 「それで、泥棒だと思っておもいきり蹴ったら友達だったの。サプライズパーティー

男 イーで集まってくれてたんだけど、もう思い出すだけでおかしくておかしくて」

女 「痛かっただろうなあ」

男 「おもいきりよ、おもいきり。背中に私の足跡がついちゃって」

女 「私、あなたのこと、全然好きじゃなかったのにね」

男 「えー」

女 「あなたが私に一目惚れしてくれて良かったな」

男 「うん」

女 「じゃなきゃ好きになってなかったかも」

男 「アハハ、君からは惚れてくれなかった？」

女 「どうかなあ」

男 「いいよ。今好きならさ」

女 「好きよ」

男 「うん」

女 「あなたは？」

男 「愛してるよ」

女 「フフフ」

男 「真剣なんだけどね」

女 「フフフ。分かってる」

男 「ホントに？」

女 「もちろん。私も愛してる」

男 「……愛してるよ。ずっとね」

女 「うん。フフフ」

男 「真剣なんだってば」

女 「分かってるってば」

男 「もー」

女 「フフフ。ねえ、私、自分がこんなに誰かを愛せるって知らなかったな」

男 「……オレもだよ」

女 「すぐく幸せよ」

男 「オレも」

女 「愛してるわ……」

女、眠る。

男 「……愛してるよ」

暗転。

明かりがつく。
女と医者、向かい合っている。

医者 「どうなさいますか？」

女 「……どう、しましょう」

医者 「あなたが決めることですので、私からはなんとも言えませんが」

女 「……」

医者 「医者として言えることは少ないのですが、私個人としての意見を申し上げるなら」

女 「ええ」

医者 「彼に真実を告げるべきではないかと。もちろん、承知されているとは思いますが、全く知らない人間から突然、私はあなたの恋人ですなんて言われたら、なかなか気味が悪いでしょう」

女 「はい」

医者 「あなただつて、今は薬が効いているとはいえ、いつ相手のことを忘れてもおかしくはないわけですし」

女 「ええ」

医者 「……好きですか」

女 「え？」

医者 「彼のこと」

女 「ええ。愛しています」

医者 「(カルテに書き込む)」

女 「愛してしまつたんです。もし薬に頼れなくなったら、私も忘れてしまうんでしょうか」

医者 「難しいところですね。正直、薬の効き目なのかも分からないのが現状なんです。

愛っていうのはね、もちろんですが、人によって、全く異なるんです。深さも大きさも、いろいろね。目に見えないからこそ、厄介です。あなたの愛の許容量と、彼の愛の許容量も、異なるわけです。例えば、あなたと彼が、お互いに対して同じくらいの愛情を持っていたとしましょう。しかし、あなたが彼よりも深い愛を許容出来る場合、同じ愛の大きさだったとしても、あなたはまだ症状を発するに至らないということになるんです」

女 「はあ……」

医者 「つまり、今のあなたは、薬によって症状が抑えられているのか、単に許容量の問題なのか、まだ判断出来ないんです」

女 「検査でしたら、いくらでもご協力しますので」

医者 「いやいや、もう十分ご協力いただいているのですが、こればかりは私共の力不足

です」

女 「そうですか」

医者 「難しいんです。ともかくね、あなたがどう彼と関わるか、それはもうあなた次第
ですから。ま、あなた自身も、彼を忘れる可能性があるということをお忘れずに、
その点を踏まえて考えていただければ」

女 「ええ」

医者、去る。

女、その場で考え込む。

男、登場。

女 「あ」

男 「ごめんね、お待たせ」

女 「紅茶一本で許してあげる」

男 「そういうと思って(と、渡す)」

女 「新作。これ飲みたかったの」

男 「良かった。紅茶を見るたび君を思い出すようになったな」

女 「あら嬉しい」

男 「ぜひ君にもタバコを見てオレのことを思い出してほしいね」

女 「タバコは嫌いだから別のものが良いわ」

男 「えー、それじゃあガムだ。ガムを見るたび思い出して」

女 「(笑う)」

男 「今まであんまりガム買ったことなかったんだけど、最近はいろいろ種類があるね。
記憶力の低下を防ぐガムなんてあって、思わず買っちゃったよ……」

男、女の幻に喋りかけながら退場。

女、男を見送る。

女、男とは反対方向に退場。

5

男、登場。タバコを吸う。

電話。

男 「もしもし。あ、今休憩中。戻ろうか?……そう、じゃああとで送るよ。え、う

ん、いつものとこ。……ハハハ、ここが落ち着くんだよな。ん？ いいじゃん別に。了解。はい、いや全然。じゃあ」

電話を切る。

タバコを吸いながら、ぼうっとしている。

ポケットに手をいれると、ガムが出てくる。

男
「いつ買ったっけな」

男、ガムをポケットに戻す。

そこに女登場。男の前を通り過ぎようとする。

男
「あ」

—了—